

# 秋田県大仙市

CLOSE UP  
人づくり⑥

七月二六日、東京駅から秋田新幹線で三時間半、大曲に到着した。駅には例年八月の第四土曜日に開催される全国花火競技大会（通称…大曲の花火）のポスターやパネルが所狭しと飾られていた。大曲の花火は全国から選りすぐられた花火師たちがその腕を競う日本一の大会として名高く、その始まりは明治四三年に遡る。毎年七〇万人を超える観光客が訪れ、大曲の街が全国に誇る一大イベントだ。今回は、この



日本一の競技大会として名高い「大曲の花火」

イベントを一か月後に控え盛り上がりを見せる大曲に、大仙市の建設部門が入る大曲南庁舎を訪ね、人材育成の現状や当センターが実施する研修（以下、センター研修）の活用状況等をお伺いした。

## 田園交流都市を目指して

その前にまず大仙市のプロフィールを簡単に見ていこう。本市は平成十七年三月、大曲市と仙北郡七町村が合併して誕生した。面積は約八六七平方キロメートルで東京二三区より広く、人口は八万九二九〇人（平成二四年三月末現在）である。東に奥羽山脈、西に出羽丘陵が縦走し、その間を流れる雄物川を軸として形成された広大な仙北平野には、東北一の米収穫量を誇る豊かな田園地帯が広がっている。また古くから雄物川の舟運や羽州街道など交通の要衝として発展し、近年においては、秋田新幹線や秋田自動車道などの高速交通網が整備され首都圏からの一日行動圏に入り、多彩な交流が可能な

立地にある。

こうした地域特性や資源を活用して、大仙市の総合計画では「人が生き人が集う夢のある田園交流都市」を将来都市像に掲げている。そして現在、その実現に向けて進行する大型プロジェクトが大曲駅前の市街地再開発事業だ。この事業は、老朽化した仙北組合総合病院の建て替えに伴い、病院を中心として、バスターミナル、健康増進センター、高齢者や児童の福祉施設、商業施設などの複合施設を整備するもので、都市の諸機能をコンパクトに集積させることで新たな市民活動の拠点として期待されている。

## センター研修を外部研修の柱に

さて大仙市建設部には、本庁組織として道路河川課、都市管理課、建築住宅課、土地区画整理事務所があり、大曲地区を除く合併七地域に支所が置かれている。現在、定員管理上の建設担当職員は一〇二名。行財政改革等の影響で合併当初と比較すると二〇名近く減少し、組織・機構もスリム化された。その一方で、行政需要の増加や建築確認申請事務の開始などもあって、年々業務量は増大しているという。そうした中で、「多様化・高度化する住民ニ



市街地再開発事業の完成パース

ズに対応していくには、これまで以上に職員の能力開発や資質の向上が求められ、人材の育成と確保が大きな課題となっています」と道路河川課の渡辺重美主幹は指摘する。ただそれぞれが忙しい中で、なかなか人材育成まで手が回らないのも現実のようだ。また建築住宅課の佐藤喜八郎課長は「団塊の世代には何人かの建築技術者がいたのですが、その後にくる年代がずっと離れていて、四〇代、五〇代の中間層がほとんどいない」と、団塊世代の大量退職に伴う技術の継承への不安を口にした。

こうした現状を踏まえて、別表のとおり、センター研修を外部研修の柱と



お話を伺った大仙市建設部の皆さん

して積極的に活用している。そして研修後には、派遣者を講師に仕立て学んだ知識や技術を課内にフィードバックし、課全体で共有する報告会も行っている。なお、土木に比べて建築の派遣者が多いのは、合併当時、建築技術者が八市町村合わせても五名しかおらず、現在は二〇名に増えたものの、その多くが経験の浅い職員だからだという。毎年、二名程度派遣している土木の技術職員もやはり若手を中心で、今年度は「橋梁維持補修」に派遣する予定だ。「来年には橋梁の長寿命化修繕計画が策定され、順次、必要な橋に手をかけていくこととなりますので、何人かは勉強してもらいたい」と渡辺主幹は考

えている。

### 地域の実情に応じた研修メニューを

センター研修の感想や評価については、昨年度派遣されたお二方にコメントがいただけた。まず「建築設計」を受講された建築住宅課の小松奈美主任は、「建築設計の基本から細かいところまで全体的なお話を伺って必要な勉強をしつつも、企画・立案から図面を描くまでの演習も入っていて、かなり頑張った記憶があります。プロジェクト管理の演習は市町村の実例を踏まえたもので分かりやすかったのですが、ただその例が大仙市でできるかという点、規模や要件が違っていて難しいとも感じました。研修環境については、相部屋というのも和気あいあいとして楽しかったです。こういう仕事をされているのかとか、今後会うことがないような方ともお話できて刺激になりました」と話した。

また、「公共建築工事積算」を受講された建築住宅課の高橋利幸主任は、「いまままで民間企業にいまして建物の積算経験はあったのですが、研修に参加して、公共工事としての積算方法をいろいろ勉強することができました。国土交通省の官庁営繕部の方々が講師でし

### 大仙市のセンター研修参加状況

【平成22年度】 5名

研修名	期間(日)
建築基準法(建築物の監視)	10
土木技術のポイントA(計画・設計コース)	4
建築S構造	5
土木施工管理	3
建築工事監理	5

【平成23年度】 6名

研修名	期間(日)
土木施工管理	3
公共建築工事積算	5
建築工事監理	5
土木技術のポイントB(施工・監督・検査コース)	4
建築設計	5
公共建築設備工事積算(電気)	3

たので、不明点や疑問点もその場ですぐ回答を得られたのがよかったです。五日間の研修で深い部分までは学習できないところもありましたが、これから業務を通じて勉強していければと思います。また、北から南までいろいろな地域の市町村の方々が来られていて、交流の場もたくさんあり、人脈をつくることができました」と話し、お二方とも知識や技術の習得に加え、研修で知り合った方々との交流が大きな財産となったようだ。

最後にセンター研修に対する要望をお聞きすると、土木部門の研修派遣を担当する都市管理課の京野和明主席主任は、「私どもの工事は小規模なもの

多いので、ちょっと敷居が高いのかなと感じる研修もあります。当市の場合、例えば都市計画道路といっても普通の道路とそれほど変わりませんが、レベルは高くてもいいのですが、もう少し小さい自治体に合わせた内容にしていただければ」と、地域の実情に応じた研修メニューを期待した。

取材を終えて、厳しい財政状況や職員数が削減される中でも、人材育成の必要性の増大に応じて研修の充実を図ろうという強い姿勢をうかがうことができた。当センターとしてもそれに応えるべく、研修ニーズや地域課題等をしっかりと把握し、研修の充実に努めなければならないと改めて思った。